

## 近世における起倒流柔術の歴史の実態

## The historical realities of KITORYU - JUJUTSU at the early modern age

中嶋 哲也 (Tetsuya Nakajima)

指導：志々田 文明

## (課題の設定)

講道館柔道（以下、柔道）は嘉納が近世に勃興した武術を変容させたものであるが、具体的にどのように変容したのかという点については明らかではない。これを明らかにするためには近世に興った武術諸流についての理解が不可欠である。そこで、本研究では柔道の成立に直接関与した起倒流について着目した。

我が国における武術の研究の中でも近世における起倒流の研究は比較的さかんであるが、多くは柔道との関連や人物研究の中で副次的に言及されるため、流祖や系譜を含む起倒流の流れを包括的に理解しようとする研究は少ない。加えて、起倒流研究の全体を通じて、使用される史料の出自（版）が明らかでない、伝書の執筆時期、執筆場所など時間的・空間的な隔たりが考慮されていない、など史料の取扱いや実証性についての問題点が指摘できる。

本研究では、このような状況をふまえ、起倒流がどのように発祥し、伝承されてきたのかを、諸伝書を用いて、時間的・空間的な条件、伝承者間の関係を考慮しながら系譜を辿ることで、実証的に明らかにすることを目的にした。その際、①流祖の特定、②基本伝書の成立について、③道統の系譜について、④起倒流の分布状況について、⑤技法の変遷、という5つの課題を設定した。

## (方法)

本研究では起倒流に関係する諸伝書を考察対象とした。その際、3つの分類概念を用い、各伝書間の関係を整理した。これにより起倒流の発祥と伝承の過程が明瞭に見えるようになった。

- ・根本伝書 起倒流以前に成立した起倒流乱及び直心流の伝書。課題①・②・⑤の解決に使用された。
- ・基本伝書 起倒流の伝承体系を構成する5つの伝書。全ての課題解決に関わる。
- ・応用伝書 根本伝書と基本伝書以外の諸伝書である。応用伝書は、i 基本伝書の解説、ii 基本伝書にはない別伝、iii 起倒流の系譜、iv 起倒流の概要という4つの性格に分類される。課題②・③・④・⑤の解決に関わる。

## (結果)

## ① 流祖の特定

起倒流の流祖は茨木専斎であるというこれまでの説に対して、茨木専斎を流祖とするのは起倒流乱という流派であり、嘉納が残した「古式の形」に通ずる起倒流の流祖は寺田正重の可能性が高いことを指摘した。

## ② 基本伝書の成立について

最も古いと思われる基本伝書は1685年に記された『地巻』である。これは模写本として現在まで至っている。この『地巻』には、寺田正重と並んで直心流創始者の寺田頼重の名がみられた。つまり、もともと直心流の伝書であったものが寺田正重により起倒流の伝書として伝承されるようになったと考えられる。

また、基本伝書5巻は寺田正重から二代下った道統である堀田頼庸の時代には全て揃っていることが確認された。しかし、堀田頼庸の時代の基本伝書には、『天巻』『性鏡』『本體』などの巻にみられるように後代のものとは記述が異なる部分がある。つまり、基本伝書の定式化がなされたのは堀田頼庸以降の世代によると考えられる。

## ③ 道統の系譜について

基本伝書の成立と堀田頼庸の弟子である瀧野遊軒の江戸への出府によって、瀧野遊軒系統の起倒流が全国各地へ広がりをもせることになる。基本伝書の成立以降、各地に広がる起倒流の特徴は、各地で著された応用伝書の内容から整理することができた。

## ④ 起倒流の分布状況について

起倒流は現在の島根県、岡山県、兵庫県、京都府、大阪府、東京都、長野県、福島県、富山県で行われていたことが分かった。

## ⑤ 技法の変遷

根本伝書と基本伝書の技法を比べると、起倒流乱に見られる技法名が起倒流にも多くみられた。また、瀧野遊軒以降の各系統では各々独自の技法の増減がみられた。しかし、古式の形につながる表裏21本の形は堀田頼庸の世代以降存続している。

## (今後の課題と展望)

技法の実相や瀧野遊軒以降の各系統の中で、柔道と関わる系統の特定・整理など今後の課題としてあげられる。しかし、本論文を通じて、近世の起倒流の系譜が整理され、今後、起倒流の各系統についての個別研究への展望がひらけたといえるだろう。